論壇

日本の若者のクルマ離れについて

横山利夫
Toshio YOKOYAMA

近年、「日本の若者のクルマ離れ」という現象が顕著になってきている。実際の若者たちはどのように考え、行動しているのだろうか。

先日、某美術大学の工業デザインを専攻する学生の皆さんと「将来のモビリティ」について話す機会があった。若者たちの「生の声」から車離れについて考えてみたい。

彼らはクルマに少なからず興味を持っている若者たちであり、クルマの存在に対して否定的ではないにしろ、最近のクルマは愛着の対象になりにくくなっているとの話に興味を持った。

彼らが育った時代は、科学技術と併せて環境が重視され、先進技術による恩恵は「当たり前のもの」になった反面、地球温暖化などのマイナス面がクローズアップされた時代である。

例えば、今のクルマは、ナビを利用すれば道を覚えなくても最適なルートで目的地まで誘導してくれる。まさに「Easy Drive」のシステムである。しかしこれが逆に、彼らは、自分で「何かをする」機会がなく「達成感」が得られないと感じているようである。目的地まで安全・快適に移動することだけが目的であれば、クルマという選択肢以外にも、公共交通機関を利用し移動中の時間に別のことに熱中するのも、彼らには定着したライフスタイルである。

彼らはクルマで移動することに、クルマでしか得られない体験を求めているように思える。事実、話の中で、「クルマそのものに乗ることが目的（自分個人の空間）」の時もあれば、「操る楽しさ」「思い出を分かち合う楽しさ」もあるということが言われていた。また、興味を持っている乗り物は、意外にも、自分で何か工夫をすることでより快適になる、古い時代に活躍したクルマであったり、自転車であったりする。つまり運転する自分が加わることで移動でき、そして目的地に到着できること、つまり移動全体の達成感を得ることに興味と愛着が向いている。

古いクルマといっても、ただの懐かしさではなく、乗り物と一体となることの本質的な楽しさがそこにあると感じているのではないだろうか。移動にクルマを使うことの「楽しさ」は彼らも感じていて、普遍的な魅力があることを彼らも認めている。ただ、クルマ自体が高機能化し、誰でも同じ結果が得られること、自分なりの工夫を受け入れてくれる許容性の少なさに、愛着を感じるモノとしての「クルマ」という見方から、離れていっているように感じられる。

また、昨今の経済情勢や将来への生活不安から、クルマを所有した時の維持費の負担は彼らには重く、クルマの所有が若者にとって遠い存在になりつつあるのが「若者の車離れ」としての現実かもしれない。

「楽しさ」をも置き忘れてしまうモビリティーになってしまったら、クルマ自らが若者から離れていってしまう。離れていくのは若者だけではすまないかもしれない。

社会環境の変化や技術進化などで、交通社会やクルマのカタチは変化していくだろうが、パーソナルモビリティを使って得られる「操る楽しさ」「思い出の共有」といった「楽しさ」については、今も昔もそして将来も「普遍的、本質的」で変わることはないであろう。若者が「愛車」と感じられるような、パーソナルモビリティーを、創り出していかなければと思う。

（㈱本田技術研究所未来交通システム研究室室長／原稿受理　2009年７月15日）